

【インタビュー記録】

## 硫黄島民1世・川島フサ子さんのライフヒストリー（2） ——戦時強制疎開から終戦を経て、戦後から現在へ——

石原 俊 西村 怜 馬  
羽切 朋子 羽切 学

### 解題

本稿は、戦時強制疎開前の硫黄島で生まれ育った94歳（2023年12月時点）の女性が、自らのライフヒストリー（生活史）を語ったインタビューの記録である。本誌158号掲載の「硫黄島民1世・川島フサ子さんのライフヒストリー——幼少期の生活経験から戦時強制疎開を経て終戦まで」（石原・西村・羽切・羽切 2022）の続編にあたる。

以下の「解題」のうち、「1. 硫黄島の近現代史」「2. 硫黄島の気候・生態」「3. 全国硫黄島島民3世の会の成立とその歴史的背景」については、石原・西村・羽切・羽切（2022）および石原・西村・羽切・羽切・渡邊（2023）の「解題」と内容が重複するため、本稿では再掲しない。いずれも「明治学院大学機関リポジトリ」で全文が電子化公開されているので、そちらをご覧ください。

川島フサ子さんは、1929年（昭和4年）5月22日、硫黄島東部落に生まれた。旧姓は水口である。フサ子さんは、父・清次郎と母・きくの間、9人兄弟の3番目として生まれた。きょうだいの構成は出生順に、長男の鬼和男、次男の鬼志男、長女のフサ子、三男の清四郎、四男の藤五郎、次女の光子、三女の法子、四女の底子、五男の末明であり、フサ子さんは長女にあたる。

フサ子さんの母方の祖父、荒井多作は千葉県銚子に生まれ、いったん母島に渡った後、1890年頃、開拓が始まったばかりの硫黄島に渡っている。荒井多作はその後、銚子に残していた妻ハルと娘2人を、硫黄島に呼び寄せている。この娘2人のうち1人が、フサ子さんの母・きくである。フサ子さんの父・清次郎は、母島に住んでいたが、その後硫黄島に渡り、西部落の笹本家で家業手伝いをしていた。

フサ子さんの祖母・ハルが清次郎を気に入り、娘のきくと結婚させた。ハルは清次郎を婿養子にしたかったようだが断られ、きくは水口姓を名乗ることになったが、ハルは土地等すべての名義を清次郎に変え、清次郎・きく夫婦の家の隣に屋敷を構えた。夫婦は主に農業を営んでいたが、清次郎が石切技術を持っていたため、墓石などの製作にも従事していた。フサ子さんは、清次郎・きく夫婦にとって初の女の子であり、男兄弟の真ん中として育ったため、親からも兄たちからもとても可愛がられていたという。

1944年、フサ子さんが満15歳の時に、硫黄島に住む女性全員と16歳未満・60歳以上の男性を対象に、引揚（疎開）命令が発せられた。軍属としての残留を命じられたフサ子さんの兄2人を硫黄島に残し、一家は父島を経由して、本土へ疎開した。都内各地を転々とした後、江戸川区逆井（現在の平井）にて東京大空襲に遭い、硫黄島から持参した荷物の大部分を焼失している。その後、硫黄島民の入植団のメンバーとして、一家で栃木県那須町に移住した。

フサ子さんは那須の青年団で、夫となる川島恒夫さんと出会った。恒夫さんは1930年（昭和5年）11月1日、父・幸太郎、母・クニヨの間に、6人きょうだいの4番目の長男として、現在の東京都大田区大森で生まれた。実際には幼いうちに亡くなってしまった兄と弟がいて、戸籍謄本上は8人きょうだいだが、現在残っている家系図には6人きょうだいとして記載されている。執事がいるような裕福な家で育ったが、その後色々な出来事があり、両親が財産のほとんどを失ってしまう。一家は両親の故郷である九州に疎開し、恒夫さんは西日本

鉄道（西鉄）に勤めていたが、終戦後、一家で那須へ入植する。

フサ子さんと恒夫さんは1952年3月25日に結婚した後、同年10月には千葉県船橋市へ移住している。麻子と恵美子の2人の子宝に恵まれる。2023年12月現在、孫5人、曾孫8人がいる。

以下、インタビュー本文を掲載する。主な語り手は川島フサ子さん、主な聴き手は、本稿の著者でもある、羽切朋子（フサ子さんの孫）と羽切学（朋子の夫）である。フサ子さんは、2023年4月からサービス付き高齢者向け住宅に入居している。インタビューは、初回を2022年1月20日に、2回目を同1月23日に実施し、フサ子さんへの最終的な事実確認などは、2023年8月26日に実施した。

[ ]内は著者側による補足・解説である。語りのなかで数箇所、こんにちの基準に照らして不適切な表現がみられるが、歴史的背景を重視する観点から、本稿では特に改変を加えていない。また、川島フサ子さんに近い親族以外の詳細な個人情報が語られている箇所は、プライバシー保護の観点から、適宜削除を行ったり、個人名をイニシャルに変更したりしている。内容に関する責任はすべて、インタビューイである川島フサ子さんではなく、著者4名に帰するものである。

なお本稿は、2021～2023年度社会学部付属研究所「一般プロジェクト」の研究成果の一部である。

「解題」の最後に、まことに残念な事実を記さねばならない。フサ子さんの夫であり、本稿にもたびたび登場する川島恒夫さんが、インタビュー実施から5ヶ月も経たない2022年6月9日未明に逝去された。享年92歳であった。5月初旬に息苦しさをうったえ、肺炎の診断を受けて入院したところ、検査で全身にガンが広がっていることが判明した。入院するまで、全身にガンが広がっていることなど想像もできないほど、元気にすごしておられた。恒夫さんにとっ

てフサ子さんとの老後の生活が、それだけ張り合いのあるものだったのかもしれない。本稿を故・川島恒夫さんに捧げたい。



#### 主要参考文献

石原 俊『硫黄島——国策に翻弄された130年』中公新書，2019年

石原 俊+西村怜馬+羽切朋子+羽切 学「インタビュー記録：硫黄島民1世・川島フサ子さんのライフヒストリー ——幼少期の生活経験から戦時強制疎開を経て終戦まで」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』158号，2022年

石原 俊+西村怜馬+羽切朋子+羽切 学+渡邊英昭「インタビュー記録：硫黄島民1世・奥山登喜子さんのライフヒストリー ——戦前の生活から，強制疎開と別離を経て，現在まで」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』161号，2023年

石原 俊 監修／吉井信秋+夏井坂聡子 執筆協力／徳間書店 制作協力『原色 小笠原の魂——小笠原諸島返還50周年記念誌』小笠原諸島返還50周年記念事業実行委員会，2018年

中村栄寿+硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報 硫黄島のんびと』創刊号，1981年

- 中村栄寿＋硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報 硫黄島の人びと——戦前の硫黄島・現在の硫黄島』2号, 1982年
- 中村栄寿＋硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報』5号, 1984年
- 夏井坂聡子 著／石原 俊 監修『硫黄島クロニクル——島民の運命』<sup>きだめ</sup>全国硫黄島島民の会, 2016年
- 小笠原諸島強制疎開から50年記録誌編纂委員会 編『小笠原諸島強制疎開から50年記録誌』小笠原諸島強制疎開から50年の集い実行委員会, 1995年
- 長田幸男『硫黄島の思い出——硫黄島墓参資料』2002年
- 酒井聡平『硫黄島上陸——友軍ハ地下ニ在リ』講談社, 2023年
- 滝口悠生『水平線』新潮社, 2022年
- 都市調査会 編『硫黄島関係既存資料等収集・整理調査報告書』1982年

## インタビュー記録本文

### 強制疎開後に東京で——空襲を生き延びる

——（羽切朋子）内地で空襲に遭ったことある？

（川島フサ子）空襲？ 丸焼けになっちゃったから [硫黄島から持ってきた思い出の品はすべて焼失した]。

——どこで？

江戸川区逆井2丁目ってところにいる。

——急に火事みたいなの came たってこと？ それともババババって [機銃掃射で] やられたの？

ドンドンドンって [爆弾を落とされて]。ビラビラビラ燃えるわ。こんな油の塊みたいの落とされて。気づいたら [家族とはぐれて] お父さん [=フサ子さんの父の清次郎] と1週間も会えなかったよ。

——1週間？

うん。毎日、下の弟 [=すぐ下の弟の清四郎] と2人でね、燃えちゃった住んでたところを、棒やなんかでかき回して [探してい] たの。その間、どこで

ご飯を食べたのか、どうやって助かったのか知らん。憶えてない。

——毎日何をやってたの？

毎日ね。焼けちゃたでしょう、住んでいたところが。そこで毎日、こうやって [かき回して] 探した。

——棒で探していたのね。

うん。亡骸、何かあるかなと思って。

——家族の誰か亡くなったの？

亡くならなかった。皆、お父さん [=清次郎] が安全な場所に避難させて。お父さんも毎日、探しててくれて。

——皆一緒にいる時に空襲にあったの？

皆一緒にいたんだけど。お父さんは、下の弟と下の妹を連れて避難したの。私と清四郎 [=フサ子さんのすぐ下の弟] は、家に残ったんだよ。

——家族ばらばらになってたんだね。それで毎日探して歩いたんだね。

探し歩いてはいないけど。毎日、住んでた所の焼け跡を棒で [かき回して]。そうしたら1週間目に、お父さんが見つけてくれた。「わーフサ子ー！」って、走ってきたよ。「みな元気だよ」って。そこから秋葉原まで歩いたんだよ。

——どこまで？

秋葉原の駅。そうしたら、[国鉄総武本線の] 亀戸のガード下 [を見たら]、防空頭巾をかぶって寄りかかって亡くなってる人もいれば、川の中にこんな一っぱい、亡くなってる人がいたんだよ。電車が通ってた亀戸のガードっていうのがあるんだよ。全部焼けちゃったんだけど。陸軍の兵隊さんがトラック2台くらいに乗ってきてね。みな、真っ黒くなった、大人だか子どもだかわからない遺体を、トラックにどんどんどんどん積んでるの。そこを家族で通ったの。そうしたら、1人の兵隊さんが、ツカツカツかって私のところに来て、「どうしたの？」って聞いたから、「こういうわけで焼かれちゃって、秋葉原まで行けば電車があるから、練馬におばさんがいるから練馬に行く」って言ったの。

そうしたら飯盒におにぎりをいっぱい入れてくれて、「これを妹さんや弟さんに食べさせてあげなさい」って。その兵隊さんの名前でも聞けばよかったけど、もうそれどころじゃなかったよね。

——ご飯貰えて良かったね。じゃないと、皆で練馬にたどり着かないもんね。電車は動いてたんだ？

秋葉原から「西の方」は動いていたの。でも千葉の方へ行く電車、京成とか[国鉄総武線とか]は焼けちゃって全然ないの。駅も焼けちゃって。私の住んでいた江戸川区逆井2丁目も、きれいに焼かれちゃったの。どこでどうなって助かったのかわからない。だーだーだーって水かけられてさ、そこに逃げてた。どうやって助かったのかね？ 気が付いたら[助かっていた]、弟の清四郎と2人。夜になると、どこにいた[=寝ていた]んだらうね？

——そうだよ。1週間は会えなかったんだからね。

うん。親きょうだいと会えなかったんだからね。何を食べて生きていたのか。どこでどうしてたんだらうね？

——玉音放送はどこで聞いたの？

練馬。焼かれちゃって、練馬に行ってたでしょう。あいこねえちゃんちへ[「あいこねえちゃん」の戸籍上の名前はアイ。フサ子さんの母きくの姉の実子にあたるが、多作とハルの子どもとして育てられた]。で、軍需工場で働いたでしょう、少しの間。練馬で終戦を聞いたの。

——ラジオ？

練馬にいた時にね、敵の飛行機がこんな油の塊[=焼夷弾]を、ドンドン落としてくるの。それがメラメラ燃えて。それをお父さんと火を消して。飛行機が上通ってるんだよ。こんな大きい油の塊、大きいのが落ちてくるの。[米軍は]私たちがいるのが見えていたと思うけど、狙い撃ちはされなかったね。家族はみんなさ、南蔵院ってお寺に隠れて。そこの林の中に皆隠れて。で、終戦後だから、那須[の開拓地に]行ったのは。

—じゃあ、こっち [=東京] では学校も行ってないんだよね。

私は [硫黄島で] 学校卒業してたもん。

—練馬行ってからは、軍需工場で働いていたんだね。

一時ね、戦時中。

**那須から船橋へ——開拓地での辛苦、恒夫さんとの結婚、父・清次郎の死**

で、終戦後になって、那須へ開拓に行ったの。[開拓の] 話があって行ったの。私は「行かない」って言ったんだけど、「お前が行かないと開拓に入れない」って。

—誰が決めたの？

お父さん [=清次郎] だよ。

—お父さんが決めて、終戦後に那須にみんなで行ったんだね。

那須に行ってからは、毎日、毎日、よその家の田んぼの道行って、那須の山を見て……

雪を見たのも、セーターを着たのも那須に行ってからだよ。雨が降るとね、屋根が篠 [=竹類の一種] みたいので葺いてあるんだけど、[雨漏りして] ザーザー入ってくるから、布団を濡れないように [部屋の隅に] 重ねて、そのまわりに家族みんなで寄り添って……開拓に行ったら、いろんなひどい目にあったよ。私、[今まで] やらないことみんなやったよ。落ち葉掃きでも、田植えでも、稲刈りでも……みんな覚えた。昭和27年 [=1952年] 3月に結婚して、7月に長女 [=麻子] が生まれて、3ヶ月たったころ、船橋に来たんだもん。

—那須の家は、屋根が杉の木の皮だったの？

最初の頃はひどかったよ、開拓に入った当時 [の硫黄島民が共同生活していた家] は、篠かなんかで葺いてあった。壁も篠みたいな……雨が降ると、ザーザーって [雨漏り]。隅の方に布団をやって、[家の中で] 傘をさして。

—傘はあったの？



（フサ子）傘くらいあるよ。最初は。一軒ずつ[家が]貰えた時は杉の皮だよ、屋根。

（恒夫）あれも上の方はボサボサしてるから、鎌で剥いでよ。

（フサ子）6畳と4畳半くらい、土間付きの。最初そんな家だった。

（恒夫）だって俺らが葺いたんだから、自分らで。

——自分らでやったんだ？

（恒夫）そうだよ。大工さんなんか[部落で]1人しかいないし、他のこと [= 仕事] やってんだから。こういう風に葺きなさいって、教えてもらって。

——出来るまで屋根なし？

（フサ子）屋根はあったよ。

（恒夫）最初は共同生活で、そこから[世帯ごとに]一軒作る時に、自分らでやったんだよ。[那須町]田代から自分たちで、自分たちの家の材料を馬車で運んできたよ。今日は、「川島家の材料を田代に降ろしますよ」っていうと、田代まで馬車で取りに行くんだよ、2・3往復。その頃、みなで共同で馬を飼っていたんだよ。そのうち1台ずつトラックを持てるようになるんだけど。

（フサ子）うちはどうやって建てたかわかんない。建てたんだよ。

——最初は水も漏れないんだって？

（恒夫）そのうち漏れてくるよ。それはそうだよ。自分たちで作ったものだから。

（フサ子）壁なんかも、戸がついてたよ。廊下もついてたよ。雨戸もあったよ。恒夫さんちは、うちよりひどかった。結婚して行った時ね、隙間風がすごい入ってきたの。廊下なんかなかった。縁側みたいのが少しあった。4畳半に板の間で、恒夫さんと私。

（恒夫）ムシロ敷いてな。

（フサ子）奥にみんな寝ていた。夜になると隙間風がひどくて、うちよりすごい寒かった。



——冬はどうしてたの？

（恒夫）囲炉裏 [で暖をとった]。でも若かったんだな、われわれが。二十歳くらいなんだから。

——でも寒かったでしょう？

（恒夫）お母さん [=フサ子さん] ちは、お風呂場が<sup>げや</sup>下屋だっただろう？  
うちは玄関入ってすぐのところに、お風呂場作ってたから。

（フサ子）うちはね、Sさんっていう大工さんがいたのよ、開拓 [団のメンバー] に。その人がみんなやってくれたの、うちに来て。

—— [フサ子さんたちの入植した那須町] 大日向は、ちゃんとやってくれたのね？

（フサ子）恒夫さんの家<sup>うち</sup>より、よっぽど立派だったよ。

（恒夫）素人仕事だもん。やったことないことやるんだから。ただ、あそこは [=那須の開拓地は]、お母さん [=フサ子さん] やわれわれがいないと、入れなかったの。

——え？

（恒夫）開拓に入れないの、若い子どもがいないと。お母さん [=フサ子さん] が一番上でしょう？ 19歳くらい。俺もそれくらい。

——だから、チャーちゃん [=フサ子さん] が行きたくなくても、お父さん [=清次郎] に行けて言われたんだ？

（恒夫）そう。行かなければ、入れないの。

（フサ子）私は「行かない、やだ！」って言ったけど、お父さん [=清次郎] が「お前が行かないと入れないんだ」って。それで、仕方なしに行ったの。行ったら変な小屋に、入口にドラム缶でお風呂が作ってあって、囲炉裏作って、そこで煮炊きして。屋根がみんな篠竹で葺いてたので、雨が降ると漏ってくるし。そんな生活だったから。だから、毎日外出て、裏の方へ登って行ってさ、旧村の人たちの田んぼがあるんだけど。草の上に座って、那須山見て、毎日、東京に帰りたいな、帰りたいなって。毎日思ってたの、嫌で。

——若い人がいないと、開拓に入れないんだね？

（恒夫）そうだよ。俺なんか九州にいて、西鉄に勤めていたから。[家族から開拓に行くって] 言われた時に、「行ってきていいよ」って言ったんだけど、「お前が行かないと開拓に入れないから、ぜひ一緒に来てくれ」って言われて。

（フサ子）私が [きょうだいで] 一番年齢が上だから。「お前が行かないと入れないから」、そう説得されて行ったんだよ。そうしたら、生活がすごい [=ひどい] でしょう？ 毎日、那須山を見ながら、東京帰りたいって泣いていた。でも、お金を1銭も持ってないから、帰るところではない。黒磯 [=国鉄東北本線の黒磯駅] まで歩いて行かなければいけないし。そうすれば、上野まで汽車乗ればいいんだけど。

（恒夫）昔はみな歩きだよな。黒磯まで歩き。

——半日くらいかかるんじゃない？

（恒夫）2時間くらいはかかるか。松林 [=那須街道] を抜けて行くんだ、

いつも。

（フサ子）お金なんか自由になかったから。お父さん [=清次郎] がやってたから。

（恒夫）黒田原 [=那須町黒田原] も歩いて行ったんだ。

（フサ子）山の中歩いて、川渡って。軍隊のさがりの靴履いて。[パンツ（ズボン）は]自分で後ろの方にゴム入れて、カッコ良くして、私は。リュックしょって、若い人が集まって、「一緒に行くぞ」って、那須 [=那須町中心部] とか黒田原に「お米貰いに行くぞ」って。

——帰りは、米しょって帰ってくるってこと？

（フサ子）そうだよ。私が一番上だからやったの。そんなこと今までやったことないよ、硫黄島では。

——今までは、お兄さんと牛が運んでくれたでしょう？

（フサ子）硫黄島では、私はなんにも百姓のことやったことないよ、家の掃除ぐらいはやってたけど。みんなお父さん [=清次郎] が教えてくれた。「人に迷惑をかけたらだめ。わからないことは訊け。訊かぬは末代の恥」って、子どもの時から教わっていたの。

——家族で硫黄島に帰りたいとかって話になったことはある？

（フサ子）帰れないから、うちのお父さんは一度も言わなかったね。兄さん2人も [硫黄島で軍属に] 取られて、どんなにか息子に会いたかったと思うよ。私は船橋で [恒夫さんと住んでいたときに]、お父さんは那須で死んじゃったんだけどね。

（恒夫）必死だったよ、家族は多いし。

（フサ子）お父さん [=清次郎] が死んだ時、私はお父さん [=恒夫] と麻子 [=フサ子さんの長女] と3人で船橋にいた。恵美子 [=フサ子さんの次女] がおなかにいて。だけど、お父さん [=清次郎] は、息子2人も戦争に取られたけど、一回も悲しいとか言ったことないよ。どんなにか悲しかったと思うけ

ど。おばあちゃん [=フサ子さんの母きく] もそう。9人産んで皆無事に育ったのにさ、2人も [軍属に] 取られて。ばあちゃん [=きく] は [息子] 2人の遺族年金を貰えて、それで生活できたけど。何にも言わないけど。お父さん [=清次郎] は、年金 [さえ] 貰えないうちに死んじゃった。

（恒夫）俺らが行った時はよ、食べるのに必死だったよ。あそこらへんの農家に買い出しに行ったんだよ。4～5人でさ。サツマイモの時期は、種芋って知ってるでしょう？ ツルをきったカス。そういうのを買いに行ったんだもん。下の山梨子 [=那須町山梨子] っていう [旧村の] 部落あるじゃん。あのあたりの農家ぐるっと行って。頼み込んで売ってもらって。

（フサ子）うちはお父さん [=清次郎] が旧村の人たちと付き合いがあったから、私を取りに行かされて、そこまで食べ物に困らなかったけど。私は種芋食べたことない。だけどさ、草摘んできて、湯がいて、米粒がどこにあるかもわからない [お粥みたいな] もの [を食べた]、最初の頃は。

（恒夫）あの頃はつらかったね。

——那須でも、開拓に入った場所によって事情が違うんだね？

（フサ子）私なんかが入った最初は、旧村も電気がなかったんだよ。で、私なんかが入って、はじめ水力電気だった。Mさんって人が班長で。その人が組合長に働いて [=交渉して]、電気が入ったんだよ。最初の頃は大変だったよ。自分で井戸掘ったりもしたよ。

（恒夫）自分で好きなどころ、これだけ土地あげるからって。宅地を作って、自分たちで家作ったんだから。もうちょっとうまくやれば良かったって、後から思うんだけど。風なんかも強かったから。当時は必死だったから。

（フサ子）吹きっさらしで。お父さん [=恒夫さん] ちとか、ほんとひどかったよ。うちよりひどかった。

## 母・きくの思い出

——ばあば [=フサ子さんの母きく] は、私 [=朋子] が17歳くらいの時に亡くなったんだよね。私、お葬式に高校の制服着て出たから。何歳まで生きてたんだっけ？

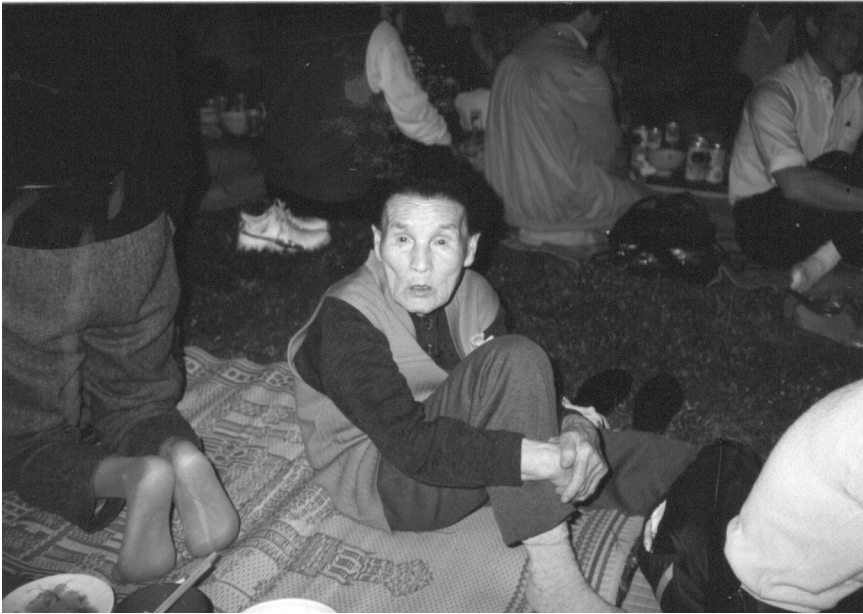
（恒夫）87歳か。俺ら、それを越しちゃったけど。

（フサ子）ばあちゃん [=きく] は、お兄さん [=きくの息子] 2人の遺族年金で幸せに暮らせたから。

（恒夫）暮らせたな。

——その分つらい思いは沢山してるからね。

（フサ子）絶対に、お兄さんのことをこぼしたこと、一回もないから。父親 [=清次郎] も母親 [=きく] も。私なんかは、「あの2人がどこにいるのか？」と年中、仏様 [=仏壇] の前で話しているけど。



——ばあば [=きく] は硫黄島帰りたがってたの？

（フサ子）[戦後に] 硫黄島には1回きりしか行かなかったから。帰りたいても、なんとも言ってなかったね。鬼和男兄さん、鬼志男兄さんのことも何も言ってなかったけどね。どんなにか悲しかっただろうけどね。

——ばあば [=きく] は、硫黄島を[強制疎開で] 出てから1回しか行ってないんだ？

（恒夫）あとはみんな、お母さん [=フサ子さん] に行けて言ってたし。そのうち俺も、付き添いで行くようになって。

### 墓参への参加

——東京都が昭和59年 [=1984年] 11月に行った硫黄島の現地視察には参加した？

（恒夫）それが最初の船 [での訪島]。

（フサ子）その前に飛行機 [での墓参] があったんだよ。船で初めて行ったのなら、ばあちゃん [=フサ子さんの母きく] と一緒に行った。「お墓の位置を決めるから」と言われたよ。「ここが硫黄島の墓地だったところじゃない？」って言って。一番年齢の多い人が花も供えて。いろんな物お供えして。まわりはすごい藪だよ。

——硫黄島に行った時に、島民墓地の場所を決めますよって時、硫黄島を見てどう思った？ 30年ぶりくらいでしょう？

（フサ子）ばあちゃん [=きく] と行く前に、私はもう行ってるよ、Kさんと一緒に。

（恒夫）その前に行ったっけ？

（フサ子）行ったじゃない。一番最初はね……

（恒夫）飛行機だったよ、あれ。

（フサ子）うん。大きい飛行機じゃないよ、小さい飛行機だよ。

（恒夫）YSか？ プロペラの。あれで一番最初行ったろ？

（フサ子）最初行った時は、硫黄島が雨で降りれないって行って、途中で引き返してきたの。だけどせっかくね、飛行機で行ったからって、江の島のまわり [=上空] を回って [帰った]。[下見たら] 人間なんか、こんなに小さくしか見えない。

（恒夫）あれが最初か？

（フサ子）そうだよ。

（恒夫）あの次に、ばあちゃん [=きく] と行ったのか？

（フサ子）私が行った時は、[自衛隊の] 兵舎なんかなくて、みんなテントだった。ちゃんと出来てたよ。「こっちがお湯で、こっちが水で」って言われて。「こんな水は飲んじゃいけませんよ」って。良くしてくれたよ、私なんかに。

——ばあば [=きく] は、硫黄島見て何か言ってた？

（フサ子）別に何も言わない。[船で経由地の] 父島に帰ってきた時に、公園みたいところにテント張ってくれて、[父島の人たちが] カメの料理 [=アオウミガメの煮込み] を出して [歓迎してくれた]。ばあちゃんは一生懸命食べていたよ。私はいらなくて言ったけど。

——ばあば [=きく] は食べれたんだ。

（フサ子）ばあちゃんは知ってたんじゃない。食べられるんだから。私はいらなくて言ったけど。

——食べていたんだね？

（フサ子）父島は [ウミガメ料理は] 有名だけど。硫黄島では食べない。

——おじいさん [=フサ子さんの父の清次郎] は母島にいたわけだし。

（フサ子）ばあちゃん [=きく] と結婚するまでは、母島にいたらしい。

——ってことは、カメを食べてるよね。

（フサ子）[硫黄島民は] 母島にいて、母島で働いてた人、いっぱいいたみたいよ。



—じゃあ、ばあば [=きく] と行って、はじめて硫黄島に降り立ったってこと？

（フサ子）船ではね。

—どう思った？

（フサ子）憶えてないよ。だって何にもなくなっちゃった。木が茂っちゃって。

（恒夫）道路はあったんだっけ？　トラックだっけ、あの頃。

（フサ子）うん、トラックだよ。

（恒夫）あの頃、なんか言ってたよな。道路は良くなかったって言ってたよな。

（フサ子）良くないよ！　私が [戦後] 初めて行った頃は野原みたいで、きれいに広場で、飛行場みたいになってて。野犬が飛んで歩いてた。

—野犬がいたの？

（フサ子）アメリカ [の占領軍] が置いていった犬でしょう？　あれが飛んで歩いてた。草がボサボサで。ガジュマルの根元からTさんの家 [の跡] の方に向かったら、あの上から見たら、自分の家 [の跡] は草ボウボウ。みんな荒れ放題荒れちゃってた。一人で置いて行かれたら怖いじゃない。

（恒夫）犬なんていたか？

（フサ子）いたよ、初めて [飛行機で] 行った時。

### 硫黄島の生家跡をたずねて

（フサ子）一番最初は、お父さん [=恒夫さん] と私、自分ち探すの大変だった。全然わからなかった。で、見つからず戻ってきた。

（恒夫）俺が初めて行った時は、家の場所探しやったんだけど。午前中に1回行って、[同じ場所に] 午後から2回目行ったけど、もうわからない。いくら探してもわからなかった。

（フサ子）そうしたらMさんから、「あんたの家まで、[木に] 印をつけてあるから、それを目印に行ってくれ」って言われて。長袖シャツを着ていたけど、

袖のところが〔木の棘などに〕ひっかかれて、血だらけになって。で、中に入っ  
て行ったら、〔生家が〕あった。

（恒夫）〔雨水を貯める〕タンクがあって、わかって。ふたつ並んで。

（フサ子）台所の、あるでしょう？ 外の、水貯めるところ。Tさんちからまっ  
すぐ入ってくと、ここに石のところ、なんか蒸し器とか入れるところがあるか  
ら。ここにかまどがあって、ここが薪置き場があって。

（恒夫）外にタンクがふたつあって。

——今もあるよ。水瓶じゃなく？

（フサ子）あるじゃないの。庭はきれいに。それでTさんちに入るところに、  
変な植木みたいな、生い茂ってるでしょう？ あれ、昔からあったの。あれ  
だけ残ってるんだよ、昔のまんま。

——どれだろう？

（フサ子）うちの屋敷の方にも、伸びちゃってるでしょう。

——岩の上にあるやつ？

（フサ子）あそこ行くでしょう？〔島民の多数が軍属として所属した海軍  
204設営隊の〕釜場の方に行くとき。道路から入ると、左側、Tさんちの屋敷  
あるでしょう？ 入口のところに、ものすごい変な木。私が硫黄島にいた、子  
どもの時からある木が残ってる。今でも残ってるでしょう？

（恒夫）なんて木？

（フサ子）知らない。

（恒夫）ゴムの木か？

（フサ子）ゴムの木はうちの裏にあって、Tさんちの方に横に〔伸びて行っ  
てた〕。

——昔は、うちの裏の方にパイナップルの木がいっぱいあってたけど、今はな  
いよね？

（フサ子）パパイヤもあったの。うちの屋敷に1本、大きいパパイヤがあっ

たよね。

——腐って倒れたりしたんじゃない？

（フサ子）腐って倒れたんだったら、跡があるじゃない？ でも全然〔跡が〕ないの。道路は昔からあったの。うちの前の、入口のとこの道路。

——あったの？

（フサ子）うちの庭があって、ここにコカ畑があって、あの道路。昔と変わらない。あそこは。

（恒夫）今、トラックとかが通ってる広い道路は、昔からあった？

（フサ子）すごい広い道路は、うちのもっと先行って、あったんだけど。サトウキビの製造してるところ。コカ畑の道路は、昔からあった。ガジュマルの木があったから、ああこのガジュマルの木はもしかして、あそこに植えてあった木かなと思ったの。なんとか壕の跡って書いてある岩があるでしょう？ あの後ろの方、うちの脇の岩の方行くと、その上に岩山があって、そこに父島にある大きなモモタマナの木、あれがあったんだから。父島にいっぱいあるじゃない？ 花も咲くよ、実もいっぱいなるじゃない？ モモタマナの木の葉っぱは大きくて、5月の節句にきれいな葉っぱを落として、柏餅を包むんだ。うちのお兄さんが木に登って、私らが下で落とした葉っぱを拾って。5月の子どもの日に、ばあちゃん [=フサ子さんの母きく] がその葉っぱをきれいに洗って。ばあちゃんが葉っぱで包んだ餅を作ってくれたの。

——硫黄島では〔柏の葉の〕代用として使ってたのかもしれないね。

（フサ子）モモタマナの木は父島にもあるじゃない？ 父島の港を出た通りがあるじゃない、そこから右の方に登っていくところあるでしょう？ 今もあるかないかわからないけど……



て、言ってたよ。玉砕になった人たちでしょ。

——霊ってことかな？

（フサ子） そうじゃないの。

——硫黄島がどんどん自衛隊の基地みたいになっちゃたのはどう思った？

（フサ子） 別に、どう思うって言ったって……しょうがないんじゃないの。戦争に負けたんだし。でもね、帰れるものなら帰りたいよ。自分ちの土地、屋敷の跡が残っているでしょう。台所とか残ってるでしょ、あれを見たら帰りたいよね。私の家は東部落で、海に行くのは大変だったんだから。レモングラス畑越えて、ジャングルみたいなところ通って、下ってまた登って。東海岸だけは、ちょっと砂浜があったの。海の中は石ガンガラで大変だよ。

——東 [部落] は、[米軍から] あんまり狙われなかったって言ってたよね。

（フサ子） あそこは上がれない [=上陸できない]。

—— [東部落が米軍に占領されたときには、] 南の、摺鉢山の方で戦いは終わっちゃってるんだよね。

（フサ子） うん [だから、生家の跡が残っていた]。

——昔の生活を思い出すでしょう？

（フサ子） うん。行きたいよ。

（恒夫） いまだに言うよ、硫黄島で死にたいって。ははは。